

「世界史」に哲学は寄与しうるか
Can Philosophy contribute to 'World History'

山口 隆介

Yamaguchi Ryusuke

要 約 または 要 旨

本校の目的は、哲学が「世界史」研究に寄与しうることを示すことである。

まず、世界史は、現在のところ、地球全体ひいては宇宙全体の成長という視点だけが、世界史成立の可能性がある視点であることを論じる。そして、このような視点での世界史研究に哲学が寄与しということを示すことが示される。

次いで、歴史から見えてくる物語を人々に提供する歴史教育に関しても哲学は貢献しうることを試みる。

最後に、哲学の方法を以て歴史に寄与しようと試みる際に超えてはならないと思われる一線についても付言する。哲学ができるのは史実の解釈であって、史料の解釈を以て歴史学を称するならそれは越権であること、史料に直接携わるなら最初から哲学的な文献解釈になるということを指摘する。

1. ビッグヒストリー・グローバルヒストリーとしての歴史と哲学

「世界史」は、授業名としては存在しているが、学問としてはいまだ形成途上の概念である。世界の各国の歴史をすべて総合すれば世界史ができるか、というと、そのような総合を成し遂げた研究はいまだかつて存在しない。

世界史というものを成立させるには、ただ一つの世界があり、各国の歴史はただ一つの世界が歩んでいる歴史の一部であるとする視点が必要である。そして、このただ一つの世界を見いだす際にどのような認識に我々は立っているかというメタ認知は、哲学の得意技である。

現在、世界史を構想しつつある視座は、大きく分けて2通りある。一つがグローバルヒストリー、一つがビッグヒストリーである。グローバルヒストリーは、地球全体という視点で歴史を再構築する視点であり、ビッグヒストリーは宇宙全体という視点で歴史を再構築する視点である。ビッグヒストリーは宇宙全体の歴史を論じる視点であるので宇宙論をも動員する。

哲学と親和性が高いのは、現時点では、グローバルヒストリーよりもビッグヒストリーの方である。グローバルヒストリーは、世界システム論的視座に立ち¹、これまでの歴史では孤立して捉えられてきた各地の文明圏あるいは文化圏が、たとえば民族の移動・交通というレベルでは相互に影響しあっているのを確認し、その結果として新たな世界が生まれるというシステムに構築しなおすというような営みを行なっている²。いっぽうビッグヒストリーは、宇宙はそれまでになかった新しいものが生まれるという時に時代が変わるといふ視座に立ち、それ以前の宇宙とは違う宇宙に成長するという宇宙の成長史の性格を持つ³。この宇宙の成長は、ビッグバン→恒星のある宇宙→重い化学元素のある宇宙→惑星のある宇宙→生命のある宇宙→知性のある宇宙と進み⁴、この知性が地球の場合は、われわれホモ・サピエンスである。

つまり、ホモ・サピエンスがあることで、そしてホモ・サピエンスが今日のように宇宙論を発達させたおかげで、宇宙は宇宙開闢の瞬間という約138億年過去のできごとを現在に反映できているのである。それは、極めて局所的な、ホモ・サピエンスの知性という場所においてのみの現象ではあるものの、確かに宇宙の過去が現在に場所を得ている。また、宇宙全体が人間の知性に知り尽くされたとは絶対に言えないが、なんらかの形で反映されているというのも事実である。すなわち、宇宙は知性が存在することによって自らを知っ

ているとも言える。というようなことは、どこまでが比喩でなく、どこからが比喩かは判然としないが、知性があることと知性以前には存在しえないものもまた知性によって成立可能となったことは事実である。すなわち、知性がなければ存在しえないものが、この宇宙に存在するという段階に、あるいは時代に入ったと考えることができる。

このような何かが存在する意味を根本にさかのぼって記述することや、その何かが存在する世界観はどのような暗黙の前提に立つかを見いだすということは、メタ認知に特化した知的作業である哲学の得意分野である。したがって、ビッグヒストリー的な視点は、哲学と親和性を持つ。いっぽうグローバルヒストリーは、世界システム論的な視座に立っていることから分かるようにメカニズムを見いだすという方向に、現在は注力しているようであり、哲学にとっては不得意分野である。これは純粋に歴史学のプロが史料を博捜し、かつ経済学等の助けを借りながら今後も研究されるであろう分野である。

しかしながら、哲学にもできることはあり、グローバルヒストリーで再構築された後の世界システム的な世界について、ビッグヒストリー的な視点で、世界の成長の意味を見いだすことはできる。すなわち、世界システムが新しい段階に進むことで、そこに住むホモ・サピエンスの精神と社会がどのように変容し、それまでの宇宙にはなかった新しい何が生まれるようになったのかを論じることができる。

クリスチャン・ブラウン・ベンジャミン (2016) でのビッグヒストリーの観点による時代区分によると、ホモ・サピエンス登場以後には、農業開始と、人新世開始が2つ画期とされているのみで、それぞれの時代の内部については、グローバルヒストリー的なメカニズム記述が主になっている⁵。しかしながら、グローバルヒストリーも歴史記述である以上、時代というものは当然見出されており、妹尾 (2018) から例をあげると、古典国家・農牧複合国家・近代国民国家という三段階が見出されている⁶。そしてまた、前掲書ではその末尾において、全体の議論を通して再構築された世界システムを根拠に「世界認識の変遷」を記述する試みがなされている⁷。単にシステムの形成と変遷を記述するだけでは終わらず、システムがどのような世界＝世界観を構築するかをあえて記述するということは、やはりグローバルヒストリーも人文学であるということなのであろう。そして、世界観について解釈を深めるという作業には、哲学も貢献できることがあると考える。世界観は歴史的に哲学が生み出してきたものだからである。

また、ひところ話題になったハラリ (2016) も、記述範囲はホモ・サピエンス誕生以降

の地球におけるグローバルヒストリーだが、人類の認知の変遷については人類の世界観の変遷を以て時代区分を行なっている。ハラリ（2016）は、七万年前にホモ・サピエンスの「認知革命」があったと想定しており、これは抽象概念に組織的に従うことができる時代の始まりとされる⁸。紀元前9000年ごろの農業革命で人間の生活が激変、穀物の記録のために文字が登場し、外付けされた抽象的な記述法に則った認識と思考が発展したとする⁹。これがいずれ自然科学的思考に結び付いていくのであろう¹⁰。そして大航海時代以降は世界には未知の場所がありそこに行けば新たなチャンスが得られるという認識が登場する¹¹。そして現在では、資本主義・消費主義が消費すれば幸せになれるという教えを説き、「信奉者が求められたことを実際にやっている、史上最初の宗教」となっている¹²。これらは史料が示す事実を、人間の認知している世界がどう変わったかを語るものとして解釈する試みであり、哲学の文献が哲学者のいかなる思考を示しているのかを解釈する作業と方法的に重なるものである。

これらの事例から、史実から読み取れる認知および世界観の変遷を以て時代変遷を明らかにしようとする作業は、哲学における解釈と方法が重なるがゆえに、哲学的方法が寄与しうると言っても、あながち強弁とは言えないであろう。

2. 歴史教育と物語

この30年ほど、歴史の教育は政治問題と絡み合っている。そしてまた、歴史教育は学習者に国民の誇りを持たせるべきものだという意見もあり、教育基本法の改正（2006年）などを見るに、そのような意見は一定の影響力を教育現場に対して発揮しているものと思われる。

国民が誇れる歴史というものは、日本では「歴史修正主義」と言われる運動とのつながりが強いと思われる。前川・倉橋・呉座・辻田（2020）では、「歴史修正主義」には一定の問題提起、すなわち「国民の物語」とか「通史」というような、この国に生きる人びとが共有し得る歴史の全体像をいかに示すかという問題」提起があったということが指摘されている¹³。これを解釈するなら、歴史の研究者でない人々の人生にとっては史実の実証の重要性は間接的なもので、直接重要なのは史実の意味であり物語であり、そして、「歴史修正主義」は中身の問題はあるものの、とにかく国民に物語を提供しているということになる。もちろん、歴史学の方法論による実証手続きにさらされて生き残っている史実に反

するので、その物語は事実の裏付けがない単なる虚偽である。史実に反する物語は、真理の象徴でありさえすれば事実性が問われない神話とは異なり、けっして望ましい結果は生まないであろう。それは、現在の現実の中に反映している過去の出来事を正しく捉える障壁にしかならないからである。

それでは歴史教育はどのような物語を語るべきか、という問いが出てくる。歴史を学問的に研究する立場に立つ限り、答えは一つしかない。それは史実からおのずと見えてくる物語である。そして、それは国民あるいは人民に向けて語られる物語でなければならないで、人々が何を目指してどのように歩んできたか、である。物語には必ず向かっていく先がある。だから、人々がどのように歩んできたか、だけでなく、その歩みからおのずと見えてくる目標を正しく浮かび上がらせなければならない。そして、ここに哲学が協力できる可能性がある。

哲学は、古代と中世においては、人間の生き方について、時代的制約はもちろん受けつつも、解釈を深め教育に反映するということがその務めであった。今日の哲学につながる元祖であるソクラテスは、書物は一冊も書かなかったが、対話による自己と他者の啓発は極めて熱心に行っていた。つまり実践的な教育者であった。その弟子のプラトンと、プラトンの弟子のアリストテレスはいずれも学校を持っている。そして、中世の哲学者の多くは同時に聖職者や修道者であり、聖なる任務として信者と同僚たちの教育に当たった。

近世以降になると、哲学は新しい社会の構想を開始する。すなわち、伝統ではなく人間の理性を社会秩序の根拠にしようとする試みが始まる。啓蒙思想である。そして、それらは次の時代の民主主義を用意した。哲学は役に立たないとよく言われる。それは正しい。哲学は社会の中では役に立たない。哲学は人間にとって本当に役立つとはどういうことかという問いへの答えの質を、根本的に高めようとする営みであり、今の基準で役立つか否かでははかることができない。哲学がその営みの参照点とするものは、人間そのものである。哲学的な人間理解を深めていくことで、その人間のために社会はいかにあるべきかが構想されるのである。そして、哲学的な人間理解の深化が、歴史をも進歩させてきた。したがって、歴史に見出される物語は、史実の中では哲学に先取りをされていると言える。

もっとも、現実には確かに純粋に哲学通りには進んでいない。たとえば、アメリカにおけるアフリカ系人民の奴隷解放は、平等主義の実現の1つであるが、これには北部が工業地帯であったため、奴隷よりも労働者が必要であったという経済構造がそれを可能にした一

面がある。つまり、奴隷解放は純粋な人権思想によって実現したのではなく、人権を認めることが経済的に有利だったから実現したという面が確かにある。それゆえ、史実を物語として語ることは、単に物事の都合の良い一面だけに焦点を当て、民主主義を礼賛して終わらせることではない。人間の歴史は、人間のもっとも善い面を実現したいという試みの繰り返しであると同時に、それが決して美しくはない、欲にまみれた仕方でも実現されたという身もふたもない事実の積み重ねである。大事なものは、現在と未来において理想を理想のゆえに実現させるために、過去の不純さを正しく自覚することである。

不純さの自覚は、同時にそれが不純だという価値判断を伴う。また植民地主義のように不純どころか明白に誤りであったことについては誤りだという価値判断を伴う。このような価値判断については、「現代の価値基準で過去を評価してはならない」と批判されることがある。しかしながら、価値判断を全くしないのであるなら、歴史を学ぶ意味はそもそもない。単なる事実の蓄積をマニアックに楽しむだけで終わる。歴史の中に誤りと言えものや正しいと言えものがあるからこそ、歴史を学ぶ意味は出てくるのである。

また、「現代の価値観で過去を評価してはならない」という批判には一つの前提がある。それは「価値基準は時代によって変化する。すなわち普遍的な価値基準など存在しない」という前提である。しかし、経済的利益のため他者の自主性を奪うことが正当化される時代などあるであろうか。植民地主義の時代であっても、植民地支配は「文明を広めることが支配された側の幸福にもつながる」という言い訳が必要だった。つまり、植民地支配は悪であるということはいつの時代でも、明瞭に、あるいは暗黙の裡に自覚されていたわけである。

そして、この「こちらの利益のため他者の自主性を奪うことは悪」という判断は、カントによる道徳法則の目的の方式による表現と合致している。すなわち、哲学の議論が、歴史を論じる際に依って立つことのできる価値基準の提供に寄与しうる実例と考えることができるものである。哲学においては伝統的に、一時的な価値基準は論じられてこなかった。およそ哲学においては、すべてが永遠の相において論じられている。永遠に変わらない普遍的価値基準の提供にも、哲学は十分貢献できるものと思われる。

3. まとめと限界提示

以上でこの短い論攷は終わりであり、最後に要点をまとめつつ、本論攷の限界も提示し

て筆を擱くこととする。

世界史は、現在のところ、地球全体ひいては宇宙全体の成長という視点だけが、世界史成立の可能性がある視点である。その場合、宇宙全体の成長の各段階が各時代に相当するのだが、それは世界観の変遷におきかえることができる。世界観の変遷、つまり世界がある見え方をしている時、その背後にどのような前提があるかを記述することは、哲学の得意とするところである。したがって、哲学的思考法は「世界史」構築に寄与できる可能性がある。

また、歴史から見えてくる物語を人々に提供する歴史教育に関しても哲学は貢献しうる。歴史は哲学の先取りされてきた面があり、歴史の物語は哲学ですでに語られている。また、歴史から物語を取り出すということは、過ちを犯した事実は過ちの歴史としてそのまま認識するということであり、何が過ちであるかという価値基準がなければできない。その価値基準を提供することに哲学は寄与しうる。

最後に、本稿では哲学が歴史研究に寄与しうる点を挙げることに終始したが、厳密にいうと歴史研究に寄与しうるのは哲学の方法論であって、特定の哲学の理論や世界観ではない。哲学において普遍的に見出せる人間像は具体的に記述されつくしたものではなく、絶えず本質に立ち返ることによって我々の認識が絶えず、人間の本質へと正しく方向付けられることによって参照点として浮かび上がってくるものである¹⁴。特定の哲学の理論が先行するならば、理論に合わせて史料を解釈していく恐れがある。それは歴史学に対する越権と言えよう。哲学ができるのは、史料に基づいて歴史学が実証した史実の意味を、人間の本質へと正しく方向付けられた視点から解釈することである。すなわち、史実を解釈することが哲学にゆるされる作業であって、史料を歴史学的に解釈することではない。史料そのものに関わる時は、その研究は歴史学ではなく最初から哲学的文献研究や哲学的資料（史料にあらず）研究となろう。

参考文献

1. 前川一郎編著、倉橋耕平／呉座勇一／辻田真佐憲著(2020)『教養としての歴史問題』、東洋経済出版社
2. デヴィッド・クリスチャン／シンシア・ストークス・ブラウン／クレイグ・ベンジャミン(2016)『ビッグヒストリー：われわれはどこから来て、どこへ行くのか 宇宙

開闢から 138 億年の「人間」史』長沼毅監訳、石井克也／竹田純子／中川泉訳、明石書店

3. 妹尾達彦 (2018) 『グローバル・ヒストリー』、中央大学出版部
4. 水島司編 (2008) 『グローバル・ヒストリーの挑戦』、水島司／浜下武志／Kenneth L. Pomeranz／桃木至朗／羽田正／山下範久／木畑洋一／秋田茂／古田和子／谷本雅之／島田竜登／吉澤誠一郎／川島博之／城所哲夫著、山川出版社
5. ユヴァル・ノア・ハラリ (2016) 『サピエンス全史 上・下』柴田裕之訳、河出書房新社

1 水島 (2008)、p.89

2 妹尾 (2018)、p.72

3 クリスチャン・ブラウン・ベンジャミン (2016)、p.5-8

4 クリスチャン・ブラウン・ベンジャミン (2016)、p.8

5 クリスチャン・ブラウン・ベンジャミン (2016)、p.8

6 妹尾 (2018)、p.79-101

7 妹尾 (2018)、p.181-190

8 ハラリ (2016)、p.35; p.42-45

9 ハラリ (2016)、p.157-159

10 ハラリ (2016)、p.167-169

11 ハラリ (2016)、p.103-109

12 ハラリ (2016)、p.181

13 前川・倉橋・呉座・辻田 (2020)、p.141-142 (当該箇所の筆者は前川)

14 前川・倉橋・呉座・辻田 (2020) には、近現代史の再評価論者の「〈日本が国際社会に反して戦争に投入したことは失敗だった〉」(p.143) という反省について、「〈国際社会は正しかった〉という歴史観があると言わねばならない」とし、旧植民地支配者・旧帝国側の、個別の罪はあったが植民地支配は正しかったという個別の罪と植民地支配そのものの正当化を分ける思考法 (p.109-111 当該箇所の執筆者である前川は「選別的思考」と呼んでいる) を内面化している (p.143) か、「〈本当はいろいろ言いたいけれども、国際社会の現実をありのままに受け入れるしかないじゃないか〉と、国際社会を与件として捉える見方」(p.143) に立つものと解釈し、植民地主義そのものを是としない立場から、植民地主義の真の清算を行なおうとしない国際社会もろとも批判している (p.144-145)。

本稿の議論に引き寄せて解釈するなら、上述の「個別の罪はあったが植民地主義は正しかった」や「国際社会の現実をありのまま受け入れるしかない」という物語は哲学的に正当化されると言えず、植民地主義の真の清算に向かう物語の方が正しいということになろう。そして、それは人間の本質を正しく参照点として設定するなら、おのずから明らかとなるというのが本校における筆者の主張である。